



Title	国文学からの美学（その1）：国学から岡崎義恵「日本文芸学」の生成まで
Author(s)	濱下, 昌宏
Citation	文芸学研究. 2007, 11, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50949
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国文学からの美学（その1）

—国学から岡崎義恵「日本文芸学」の生成まで—

濱下昌宏

はじめに

「国文学史」という表題の書物を開くとき、多くは文学作品の歴史的展開に関する記述が主題である。それは「国—文学—史」のことであり「日本文学史」の意味である。しかし場合によっては、ひとつの学問分野としての「国文学」の歴史が述べられていることもあろう。「国文—学—史」の意味であり「日本文学研究史」のことである。わかりにくいときには近代欧語に代えてみるという常套法に則して英語に直すと、「国文学」は“national literature”と“national learning”の二様に訳し分けられることに気づく。このように「国文学」という語法は概念との対応において両義的となる。

その混乱を嫌うのであれば、国文学は「日本文学」と言い換えればよいだろう。ちがいはニュアンスないし聞くもののイメージにある。それを「日本文芸学」と呼ぶとき、さらにどのような問題意識、ないし変更と変革への意志が働いていたのか。その名称で人口に膾炙しているのは岡崎義恵（1892-1982）による研究であるが、名称そのものについては岡崎の独創ではない。それはともかく、岡崎義恵が遺した業績はきわめて興味深い。その理由を挙げてみよう。

まずは、次の3点の理由が挙げられる。第1に、国文学の中に身を投じながら、彼が美学や美学的文芸学への強い関心を持ち続け、それを自らの専門領域である国文学の分野に活かそうとしたこと。第2に、彼の『文芸学概論』（初版昭和26年）は、著者が美学専門家でないにもかかわらず、こうした巧みに整理された文芸美学書が書かれたこと。第3に、「日本文芸学」をめぐるさまざまな議論のなかで、岡崎義恵の立場は学会内においても実に挑戦的かつ革新的であったこと。

岡崎文芸学へのさらなる関心を広げると、第4に、それは美学と文芸学を体

系的に統合しようとした試みの先駆者としていやおうなく注目せざるをえないこと。むろん、たんに参照枠ないし模範例を西洋文芸学にとってそれを便宜的に日本文芸に応用しただけではないのか、といった危惧もある。しかし、岡崎自身はあくまでも正統的な国文学的研究をふまえており、まちがっても（洋学者）の範疇に入るものではない。さらに第5に、そのように国文学と美学的文芸学という、異なる学問分野での混交・融合・領域越境は、日本の文化的伝統ともいえる折衷主義のようでもあり、また今日の流行の先駆けのようにみえるが、はたして実際は、安直な融合とか協調（コラボレーション）以上の成果を挙げたといえるのか。異分野からの方法論や概念装置の移植によって、それまで内在的に発展してきた独立分野における新たな学的概念構成はどのようにして可能なのか。また、いくぶんなりとも融合が成功した場合、得た効用とはどのようなものであったか。そして岡崎文芸学は根本的な意味で、国文学と美学との総合という点で成功していると呼べるのかどうか。

岡崎のみならず、明治以降の少なからぬ国文学者たちは国文学界への苛立ちを持っていたように見える。その理由は憶測するしかないが、端的に言って国文学における国学的要素への違和感というべきであろうか。そこから、彼らは国文学に代えて「文芸学」を構想する。

さて、結論先取りではないが、本研究全体の趣旨は次の通りである。—「美学」とはもとより翻訳語（原語：“aesthetics”, etc.）であり、日本の美学は翻訳学という性格を出発点を持っていた。つまり、美学は元来、洋学の一部であった。そして、大塚保治や大西克禮といった先駆者は洋学美学の範疇で日本の伝統的美意識を捉え直すことも試みているが、日本の主体的美学の試みは森鷗外、二葉亭四迷ほかの、大学制度内の美学界とは別の人材によってなされてきた（拙著『主体の学としての美学—近代日本美学史研究—』晃洋書房、2007、参照）。また、一方で国学や国文学という伝統的学問を持ちながら、その成果を（日本の美学）形成に十分役立ててきたとはいいいがたい。そうしたなかにあつて、岡崎義恵は国文学畑を一貫して進みながら文芸学的美学（美学的日本文芸学）を追究した。彼の残した業績を検討しながら、国文学の内在的伝統からの日本美学の可能性について考察してみたい。その際、岡崎がなぜ美学へと接近したのが興味深い論究主題となる。そこには、伝統の国文学への反抗を美学を介して為すと同時に、美学を彼独自の「日本文芸学」の構想の中に生かすことで、西洋美学の自前化の試みがみとれる⁽¹⁾。

さて、そうした企図による論考の「その1」として本稿は、岡崎自身のテキストの検討に入る前の予備作業として、岡崎文芸学生成にいたるコンテクスト、すなわち、当時の国文学の状況や国文学者たちの危機感、むろん就中、岡崎義恵の問題意識を整理したい。国学から国文学へ、そして国文学から日本文芸学へという流れは、当該分野におけるいわば近代化への歩みであった。

1. 国学から国文学へ

明治維新以降の近代的学制のなかで、国文学研究の中心は東京大学文学部国文学研究室であった。その原型は、明治10年に大学設立とともに和漢文学科として創設され、次に、明治18年に和漢文学科より和文学科が分離独立する。さらに、明治21年に和文学科を改称して国文学科になる。この時点で「国文学」が公式の名称としての権威を得ることになる。その主任を担ったのは芳賀矢一である。爾後の展開をみるまえに、あらためて国文学の基礎をなした「国学」について整理しておきたい^②。

国学を端的に定義すると、儒学が治者の立場に立つ経世の学であるのに対して、国学は治められる者の立場に立つ経世の学であり、それゆえに幕末期に尊皇思想を掲げて反体制的倒幕運動を思想的に支えることになった。

近世国学の祖は契沖とされるのがふつうであるが、平田篤胤は国学の三大人として荷田春満・賀茂真淵・本居宣長を挙げて契沖をはずし、また篤胤の弟子たちは師の篤胤を加えて四大人とする。平田篤胤や幕末の国学者などが契沖を国学者のなかに含めようとしなかったその理由は、契沖の学風が純学術的であって古道闡明とか国体論とかに及ばなかったからであろう。すなわち、いわゆる国学者とは、国家観念を強く持ち、尊内卑外の国粹論を主張、世道人心を古のまことの姿に復し、社会組織の改造をも考えた経世家的思想を持っていた者が多い。

興味深いことに、明治維新政府は儒学系（とくに陽明学）の志士である旧下級武士によって主導されたが、同時に、明治初頭、維新改革に参画したのは大国隆正・福羽美静といった平田派の国学者であり、古代律令制から神祇官を復興させて祭政一致を進め、大教宣布を施行する。明治政府のイデオロギーは、国家政策として国民的自覚による尊皇絶対主義を主導し、古神道の尊崇、つま

り君臣和楽の古代政治にもとづく廃仏毀釈思想へと突き進む。具体的には、明治元年末に京都に皇学所が設立されて国学中心の教育がなされる。その教官には平田^{てつね}鏡胤、矢野玄道、権田直助、玉松操、井上頼国といった平田派が多数を占めていた。明治維新直後に復活された神祇官制度であるが、はやくも明治5年には神祇省が廃止されて教部省となり、復古的な教育の政策は方向を変えていく。その結果、当然ながら平田派は急速に勢力を失って国民教化の事業から後退することになる。それは学的伝統としての国学の後退でもあった。

そして大学制度の整備が目指される。学制の西欧化がしだいに顕著になっていく。明治10年ころより、ヨーロッパ諸学がさかんに輸入されるという〈文明開化〉時代にあわせて、国学をいかに新時代に対応させるか、という課題が立てられるのである。そして上述のように明治10年に東京大学が設立される。文学部のなかの「和漢文学科」は、考証的学風が中心の和文学が研究・教育された。教授陣は、伊能^{ひでのり}顛則の門下生であった横山由清と小中村^{こなかわらまよりのり}清矩(1821-1895)である。とくに後者は近代国文学研究の先駆者とも言える人物であり、「古事類苑」を編纂し、『官制沿革略史』『歌舞音楽略史』などを著す。さらなる教授には、岡本保孝門下の木村正辞がおり、また平田学派からは飯田武郷が中助教として和文学・古今法制を教えた。

和漢文学科とならんで、明治15年(1882)には東京大学文学部付属として古典講習科が創設される。それは時の総長加藤弘之が国学者の伝統が絶滅するのを憂えて文部大臣に上申して開設されたものである。最初、和文科(のち国書科)、翌年、漢文科(のち漢書科)が設立される。和文科の最初の入学生には、荻野由之(1860-1924)、関根正直(1860-1932)、落合直文(1861-1903)、池辺義象(1864-1923)がいた。しかし、教授内容も文学部和漢学科ほど一般的でなかったせいか、入学者は漸減、明治20年、21年に2回の卒業生を出して自然消滅してしまう。

こうして明治なかばにいたって学制も定着しつつあったが、さらに国文学をめぐっての明治以降の画期的事件をとりあげるならば、国学和歌改良論争、国語国字論争、そして新体詩論争などが、伝統的国学の変容に作用したものと見て注目すべきであろう。そのような試行を経て学問分野としての国文学が確立するにあたっては、まずなんといっても芳賀矢一(1867-1927)の功績が傑出している。

2. 文献学的国文学

芳賀矢一は明治 33 年から 35 年にかけてドイツのベルリン大学に留学し、ここでベエク (August Böckh, 1785-1867) の古典文献学を見出す。そのドイツ文学に触発されて国文学における文献学が成立していく。文献学的国文学即国文学の成立である。それは、ドイツ文献学 (西欧的科学精神) と近世国学 (日本的伝統) とを結合させたわけであるが、そうすることで国学の方法が科学としての自覚をもって推進されていくという、国学の近代化が成就されることになった。そもそもベエクの文献学 (Philologie) とは、文献・言語を通してドイツを知ろうとした「ドイツ学」⁽⁵⁾であって、古典文献学を国民の学としようとするナショナリズムの意識に裏打ちされたものであった。その精神を継承するかたちで、芳賀は国学からの生え抜きから国文学へという方向を文化ナショナリズムで支えようとした。明治 40 年刊行の『日本文献学』では、それが「日本の真相を知る学問」であり「日本の (古代) 思想精神を明らかに」するものだとして述べている⁽⁴⁾。

芳賀の死後、昭和 3 年に『芳賀矢一遺著 日本文献学・文法論・歴史物語』(富山房、昭和 3 年) が刊行される。そこに収録された「日本文献学」は明治 40 年度東京帝大講義を高木武が編集したものである。「日本文献学」とは“*Japanische Philologie*”であり、それが国学である、と芳賀は書く。類似の語法である「和学」は「漢学」に対抗して使われる言葉であるが、その和学が国学へと成長するにあたっては、森長見「国学忘貝」、荷田春満「国歌八論」といった業績が貢献した。そもそも国学の内容はあまりに茫漠・非学問的であって、そこに含まれるのは文学・語学・国史・神道・法制・有識故実 (武家故実・公家故実)、等々と多岐にわたるのが実情であった。そこを芳賀は「国学は即ち文献学である」⁽⁶⁾と規定する。たとえば荷田春満は上代の文献を本とし、古語の解題を根拠として、日本の真相を知ろうとした。そのように、国学とは「文献を通じて、之を根拠として、日本の真相を知る学問」*Nationale Wissenschaft*⁽⁶⁾である。

そして芳賀は徳川時代の国学者・古学者批判を展開する⁽⁷⁾。その要点は、(i) 動機において儒教・仏教の影響を避けんとするあまり、牽強附会的になっている。宣長のように、漢学の影響に言及しない学者もいる。(ii) 篤胤のように、日本

をすべて根本とする悪弊がある。(iii) 古代を尊びすぎである。これは時代遅れに陥っている。一方で今日では、西洋の学者たちは新しい研究法により東洋古文明を研究しているのである。(iv) 古代に偏して後代を打ち捨てている傾向が強い。(v) 補助学科の知識が欠乏している。

以上のように考えて芳賀は、国学者という名称では誤解があるとし、あらためて日本文献学者と称して、西洋の文献学者の方法にのっとりするのである。その狙いは、「国学」のもつ非学問的雑多さを整理かつ排して、西洋の学問の基準に適合するような「学」としての方向をめざし、そこでドイツ文献学に範をとることで「国学」の文献学的再構築をはかることであつた。そして名称もまた「国学」に代えて「国文学」と衣替えしたのであつた。

ドイツ文献学の導入の経緯については、上述のように芳賀矢一を嚆矢とする。そして批評の概念が不明とされながら文化史的研究という方向をとることで、ドイツ文献学を援用する研究が続くことになる。村岡典嗣(1884-1946)『本居宣長』は、国学をふまえドイツ文献学を範に「史的文化学」としての日本思想史学を展開する。文献学と歴史学との総合といえよう。国文学においては久松潜一『契沖全集』第3篇で思想学説の研究をみせるが、そこではベエグ、エルツェ(Karl Elze)の文献学を批判的に摂取することで契沖の方法論を定位している。

こうして国文学の歴史は明治における文献学の成立と共に始まる⁽⁶⁾。近世国学の伝統とヨーロッパの学問・科学精神の影響とが相俟って、国学を科学的方法という自覚をもって推進したのが芳賀矢一の文献学であつた。底流には国学の近代化という課題があつた。明治維新および維新後の改革に参画した平田派を主とする国学の没落という事態も背景にあつた。国学をいかに新時代に対応させるかという危機意識がそのエネルギーとなって近代国文学の成立があつたともいえるであろう。

さて、こうして確立した文献学的国文学から、次に生成していくのが文芸学的国文学である。その際、前者がドイツ文献学からの影響によるように、後者はドイツ文芸学に依拠するところが大きい。

3. 文芸学的国文学

学的範を仰いだ対象をドイツ文献学からドイツ文芸学へと広げることで、文献学から文芸学へと国文学の関心が移行していくが、そこでは国語教育学を専門とする垣内松三(1878-1952)の先駆的業績がきわだつ。垣内は方法論的自覚を重んじ、国民生活史の探求のために有職故実の研究をする。衣食住をあまねく包含する国民的社会生活の検討を行い、また文学直観の立場において国文学のミリュー〔風土と生活〕を究明しようとした。そしてドイツ文献学のうち、エルツェの方法体系を分析・紹介する。大正4年、東京文科大学における彼の講義題目は、「国文学の背景」「国文学研究法」「国民生活の二様式」「日記隨筆に現はれた日常生活」であつた。さらに文芸学へと関心を広げた垣内は、大正9年より東京高等師範学校にて「文学概論」を講義、エルスター説を紹介する。こうした垣内によるドイツ文芸学の紹介の真意には、文学史と文芸学(文学概論)との関係を明確にしようとする意志があり、また日本の文学研究の欠陥は文芸哲学の意義を黙殺していることにあるという信念があつた。マールホルツ(Mahrholz, 1889-1930)説である、文芸哲学こそ文学史の先駆、という立場を踏襲したわけである。垣内はまた、モウルトン「文学の近代的研究」やディルタイ解釈学などから学び、文学史より〈文学〉史が求められており、そのために文芸哲学による補強が必要と考えたのである。

文芸学的方法へのさらなる関心は昭和期に入って高まるが、それは明治以来の国文学に対する反省の機運ともいえるだろう。大正末期からドイツの文芸学が積極的に紹介されていったことも後押ししたにちがいない。たとえば、昭和5年には、マールホルツ『文学史と文芸学』(Werner Mahrholz, *Literargeschichte und Literaturwissenschaft*, 1923, 角田俊訳、天人社、昭和5年12月。後、『改訂 文芸学と文芸史』桜井書店、昭和17年10月、3版：昭和21年7月)が公刊され、また、昭和7年から8年にかけて、木村謹治監修により『独逸文芸学叢書』が建設社より刊行される。そのうちの一冊、エルマティンゲル『文芸学の法則』(武田忠哉訳、昭和7年、定価80銭)の巻末広告には以下の書名が並んでいる⁹⁾。()内の著者名原綴は濱下による。このうちどこまでが実際に公刊されたかについては未調査。)

ペーターゼン (Julius Petersen) 『文芸学概論』 芦田弘夫訳、定価 80 銭
 エルマティンゲル (Emil Ermatinger) 『文芸学の法則』 武田忠哉訳、昭和 7
 年、定価 80 銭
 シュルツ (Franz Scultz) 『文芸学史概説』 村岡一郎訳、近刊
 グンベル (Hermann Gumbel) 『文芸と民族性』 榊原比良夫訳、近刊
 チザルツ 『文芸学の週期律』 星野慎一訳、近刊
 メディクス (Fritz Medicus) 『比較芸術史の問題』 堀内明訳、近刊
 ユング (Carl G. Jung) 『心理学と文芸』 中村恒雄訳、近刊
 ペッチュ (Robert Petsch) 『文芸作品の分析』 中村恒雄訳、近刊
 ザルネツキ (Detmar Heinrich Sarnetzki) 『文芸学と文芸と時評』 伊藤武
 雄訳、近刊

いちはやくドイツ文芸学に注目したのは上述のように垣内松三であった。彼は、『日本文学研究法』（「岩波講座 日本文学」所収、上：昭和 6 年 7 月、下：昭和 7 年 1 月）や「文学理論の研究」（『国文学誌』昭和 7 年 5 月）において、「形象性」の概念を中心とする方法体系を提起している。彼は「文芸学」の呼称は用いなかったが、文献学的国文学への批判を意図していた。彼なりの国粹意識に基づき、世界文学の中での「日本文学」の位置づけを試みようとする。畢竟、ドイツ文芸学をモデルとする科学的・体系的学への志向と整理が垣内の真骨頂であった。「あまりに雑学雑居と云ふ習弊のある『国文学』に嫌（あきた）らず、学的の潔癖症から」⁽¹⁰⁾、という研究者の態度がそうした革新の原動力であった。そして、文芸学的国文学からさらに日本文芸学への関心が国文学者の内外から高まってくる。

4. 日本文芸学

「日本文芸学」という言葉は、昭和 4 年 3 月発行の石山徹郎『文芸学概論』あたりから始まるようである⁽¹¹⁾。さらに昭和 6 年には風巻景次郎「日本文芸学の発生」『国文学誌』昭和 6 年 10 月・11 月）が登場し、文献学的国文学の中に介在する鑑賞批評的態度を批判する。風巻の立場からは、歴史主義的に作品の価値はその本来の位置において決定されるべき、と主張された。また、昭和 7 年 1 月には『國語と國文學』に高木市之助「国文学と日本文芸学」が発表され

ている。そして、昭和9年10月には、『文学』が「日本文芸学」特集で発行される。特集号には方法論（注釈、考証）、一門の業績、社会学的考察、ドイツ文芸学や美学との関連、といった論点からの寄稿が集められている。その巻頭論文として、岡崎義恵「日本文芸学の樹立について」が掲載され、旧来の国文学の雑学的な性格を払拭して美学を基礎学として隣接諸学を補助学とする日本文芸の様式論的研究を主張している。岡崎文芸学の産声といえようか。同特別号の「編輯後記」は、おそらく特集号の編集に関わった西尾実の手になると考えられるが⁽¹²⁾、「日本文芸学の名はまだ学界にも新しい。しかしそこには、既に単なる熱望や期待のみでない何ものかが動いている」。「日本文芸学はドイツ文芸学を範とし、適用することによって樹立せられるであらうか。或は文芸活動の一面たる文芸批判に基礎を置いてその成立が見られるであらうか。或は国学的研究又は国文学的研究を改造することによって、その樹立が遂げられるであらうか」、と将来への期待と不安が語られている。

他方で、別の視点から国文学界の内からの文芸学的研究の要請が興っていた。斉藤清衛は「学界への批判と反省」と題する論文で、国文学界以外の者が日本の古典について評論する傾向に注目する⁽¹³⁾。文壇人の中からは、たとえば茅野蕭々（1833-1946）が『堤中納言物語』について論じたり、正宗白鳥が『方丈記』を取り上げたりする。哲学者では和辻哲郎、三木清、谷川徹三ほかの面々が古典を論ずる。それに対し、明治の学界の国文学者のほとんどが大学古典科の出身であって実証主義の学風に染まりきっているために、古典の批評ができなかった、と。それが芳賀矢一により革新されたのだが、しかし、日本文学全体の中に古典をいかに位置づけるについては限界があった。国文学界には書誌的・考証的学風の追隨者を“学者的才能”ゆえを以て推奨したり、たんなる「輯編」を以て大研究と勘違いしたりする偏見が横行していた、と斉藤は指摘する。

くわうるに、外来文化輸入過剰時代にあつて学力優秀者は外国学科、哲学科を選び、国文学科に進学しないという事態が続いた。それでもやがて、舶来文化を見透かすようになり、古典への関心が高まり国民自らの自覚の深まりをみるようになる。にもかかわらず、欧化への反省が生まれながら、国文学者における自覚の低さはいかんともしがたい。自覚と共に方法論の欠如も歴然としている。他方、英文学者からの日本文学論も盛んになる。一例が土居光知（1886-1979）の『文学序説』である。従来の日本文学では、歴史をつなぐ体系的

な歴史観が欠けているために、けっきょく書誌的・実証的に拘泥して批判的視点が得られず、たんなる古典尚古派にとどまり古典を崇拜し偶像視することになったのである。

こうしてみると、岡崎文芸学のひとつの意義が見える。つまり、国文学者の中からの自覚的・批判的な研究（方法論・史観・客観的批判的・審美的）を追究したわけである。そして彼の場合はドイツの心理主義美学・文芸学の適用という面が強いが、また別の問題意識としては、当時勢力を増しつつあった唯物史観的文芸学（石川徹郎（1888-1945）、近藤忠義（1901-76）、本間唯一（1909-59）、ほか）への対抗意識もあつたのではなからうか。

5. 岡崎文芸学への動機と契機

岡崎義恵はどのようにして日本文芸学の構想に至ったのか。ここでは傍証的資料をあげるにとどめるが、意外とそこに本音ならぬ彼の個性の真髓が垣間見えるかも知れない。

「東大学生の頃」と題されたエッセイにおいて、岡崎は国文学科に失望して大塚保治の美学講義に出席する自分を回想している。最初、夏目漱石・上田敏のような大家を理想として東京帝大英文学科に入学（大正3年）するが、ところが講義に失望、国文学科に転じる。「しかし、私は決して国文学科というものに愛着を感じたわけではなく、正直に言えばいくらか嫌悪に近い情をさえ抱いていたのである。殊にあの国学というものは私と血縁の乏しいもので、国学の後継者としての国文学というものも、私の好みには合わないものである。私は国文学者と呼ばれる時、背筋に寒けを感じたこともあるくらいである」⁽¹⁴⁾。

英文学科に入ったのは英文学に愛着を持っていたというよりも、「文芸というものに心を惹かれたからであつた。ところが、大学の英文学というものは、実に余りにも英文学であつた。文芸の研究とはいいいにくいものであつた。〈…〉私はローレンス教師の講義に出て見て、最初の時間がチャイルド＝ハロルドという言葉の考証に費やされたのに驚いた。私はパイロンの美的価値を教えられるつもりで出席したのに、全く意外のことであつた」⁽¹⁵⁾。

また岡崎は、国文学とは日本文献学のことであるというように聞いて意外に思う。「今日から考えると、一語一字をも忽せにしない訓詁学も結構なことだと

思うし、私自身もそろそろそうしたことをやり出しているのであるから、この大学一年生の失望は、若気のなす所だったかも知れない。第一、当時崇拜していた上田敏博士の「細心精緻の学風」をよめば、その失望のいわれなきものであることも知られるわけであるが、その当時には何しろ余りに文芸的なものを渴望していたのである⁽¹⁶⁾、と。

そして明言する。「今日から考えると、大学で文芸とは何かということを教えられたのは、美学の講義であったといってもよい。高等学校で数学を修めていなければ哲学科に入れないという規則が、もしその当時大学になかったならば、私は美学科に転じていたかも知れない。しかし、それが不可能だったので、私は学校の課程に煩わされることの少ない国文学科に入って、自由に文芸に親しもうとしたのである⁽¹⁷⁾。

このように国文学科進学当初から、岡崎は国文学に違和感ないし距離感を持っていた。それが彼を独創的な国文学者へと仕立てていく。「私の出発点が決して国学者のような伝統主義ではなく、むしろ普遍的な文芸の美を求めるための遍歴を志していたことは否めない⁽¹⁸⁾。岡崎における理論的・抽象的概念化への傾向は、いわば天性のものであったようにみえる。

久松潜一は『日本文学研究史』(山田書院、昭和32年)の「序」において、日本文学研究史は研究書史から真の研究史に進まなければならない、と述べ、さらに「研究史の中心は本文批評史や注釈史よりも文学批評史や文学理論史でなくてはならないと思ふ⁽¹⁹⁾と、文献学的研究よりも批評的・理論的研究の重要性への自覚を示している。そして、研究史を分類して歌学時代、国学時代、国文学時代と分け、その次は「文芸学時代となるべきであらう」と明言する⁽²⁰⁾。

じっさい、日本のいわゆる近代化と共に国文学の発展と研究史もあった。歌学・国学から国文学へと分離・独立していく道筋には国学和歌改良論争があり、また芳賀矢一による文献学としての国文学という位置づけもあった。さらに、国文学の発展的解体をめざして「文芸学」という構想が生まれていくのであるが、それは岡崎文芸学が唯一の企てではなく、それもまた国文学研究発展史における、いわば必然的な潮流であったのであろう。

6. 岡崎文芸学の生成へ

上記の「日本文芸学」特集号(『文学』昭和9年10月号)が発刊された頃、

国文学界は文献学に基づく本文批評と古典作品の注釈的研究の全盛期であった。それゆえにこの特集号は相当に衝撃を与えたようだ。巻頭の岡崎論文「日本文芸学の樹立について」は「当時の国文学界の水準を遙かに越える思索力を示していた」⁽²¹⁾が、そこにおいて岡崎は当時の国文学界の状況に即して日本文芸学樹立の可能性を論じている。岡崎による国文学批判は①雑学性、②無批判性、③非体系性、という3点に要約される。「雑学性」批判というのは、国文学の中心的な研究領域に入り込んでいる文献学・書誌学、また非学術的な鑑賞・批評、国語学的解釈、さらにその他の雑学的要素を払拭することである。そして岡崎が提言するのは、「文芸性」を中心とする日本文芸様式の独自性を研究の対象とすべきである、ということであった。その場合、「日本文芸史」という名称はなぜ不十分であるか。作家・作品・思想・内容等々の発生する原因やその影響といった点のみの研究であるならば「日本文芸史」という名称で十分であるが、その中に「普遍的文芸性」を認識し、「文芸の種類」としてもつ意義を考え、「日本文芸様式」といった日本文芸の独自な要素を把握して「日本文芸」が一般文芸体系において占める位置の確保をめざすためには、「日本文芸史」の名では不十分である。「国文学」を浄化した「日本文芸の学」と、「文芸学」の日本における存在を明確にする「日本の文芸学」を樹立することをめざすが、「日本文芸の学」と「日本の文芸学」とは帰一する、と岡崎は捉える。

文芸の概念規定もまた試みられる。「文芸」と他の文献・文芸以外の諸文化現象であるたんなる記録・実用的言語とを分かつのは、「芸術」とその背後にある「美」である、と。「日本文芸」を直接の対象とし、文芸の民族的様式を通じて文芸の本質を究めんとする熱意ある研究者の賛同を得て方法論の樹立をめざす岡崎は、このように周到に研究対象の限定を試みようとする。こうした学が必要かどうかを決定することが急務、とも主張した。そうした学を要請する必然性と意欲の共有を企てるのである。

「日本文芸学」という構想については、岡崎は西尾実が『日本文芸学概論』（法政大通信教育部）や「日本文芸入門」（『世界教養全集 14』平凡社）などにおいてすでに先駆的に考えていたと認める。ともあれ、岡崎は明治10年12月に『日本文芸学』（岩波書店）を上梓する。安良岡によれば、「この書の刊行によって、当時の国文学界はこれらの業績の質の高さを知らされるとともに、氏の主張を全然無視することができなくなり、多少でもそれと対決し、批判する方向を取らざるを得なくなった」⁽²²⁾。

西尾実『日本文芸学』をめぐりて」（「文芸時評」『文学』昭和11年2月号）は『日本文芸学』の主張に対して好意的・同感的であった。西尾は岡崎の主張を次のような3点に要約している。(1) 岡崎の言う日本文芸学の根本的な課題とは、「国文学を在来の雑多的な性質から救い出すこと」、つまり「国文学をして国文学本来の立場に立たしめること」=国文学・日本文芸学の研究対象を〈文芸性〉そのものに置くことにある。

(2) その「学史的な課題」とは、これまでの文芸学に雑然と発達してきた訓古注釈的・文献学的・鑑賞批評的・原典批評的など、さまざまな研究を批評して一つの立場を決定することである。そのために、鑑賞批評に立脚して文芸性の内面的規定である美の存在様式を捉え、さらに科学的な様式論・様式史を発展させて、「非科学的な精神史」でもなく「芸術的な作品解釈」でもない「科学的な方法」を確立することを岡崎は目指している。

(3) 学界的な課題とは、〈国文学〉という名称の持つ鎖国的・国粹主義的な偏狭さから離れ、また〈文芸学〉〈世界文芸学〉などといった名称の鵜呑み・受け売りの無自覚を脱することにある。「美の存在様式に於ける日本の様式を簡明することによって、二つの立場に止揚を与えようとしてゐること」に岡崎のめざす方向の意義がある。

このように西尾による岡崎評価は高い。彼は岡崎を「芸術的直観の鋭さに立った鑑賞者としての著者」、「美学的教養の深さに立った批判者としての著者」、さらに「文芸性の客観的根拠設定の確かさに立とうとする科学者としての著者」と位置づけている。

結語 岡崎義恵の個性

岡崎義恵は『日本文芸学』の「跋」において、自分は「国文学界に対し、訣別の辞を送るつもりで、思ひ切つた事を書いたのである」⁽²³⁾という書き方もしている。なかなか激しい情熱をもった学者のようである。

彼の随筆集『雑華集』には彼の個性や率直な私見が示されていて興味深い。まず、彼には土佐人という自覚と誇りがある。土佐人の性格について、「南海の怒濤と暴風と烈日とは、今もなお老境の中にひそんでいる。私の心は今でもやはり現状に安んじ得ない或る覇気のようなものを潜めている」⁽²⁴⁾。さらに、「土佐人は圭角があつて人と和し難く、終を全うし得ないような欠点があるようで

ある。坂本龍馬・板垣退助・浜口雄幸などみな刺客の手に斃れた。〈…〉これまで土佐人の理想は大臣・大将であった。特に軍人になることは青年の理想であった。しかし、これからは学芸の世界がそれに代らなければならない。学者や芸術家として秀でた人は、土佐にはそう多くはないようであるが、徳川時代には相当な国学者などもあり、近頃では寺田寅彦のような人も出てはいる。今後はそういう人が理想となって行くであろう。ところが寺田寅彦にしても、ちょっと類のない学者的文人として、中々えらいには違いないが、風格があるというような人で、一代の文運を支配したというような抱擁力のある人ではない。鷗外とか、漱石とかいう人とは違っている。どこか土佐的な辺土性を感じしめる点がないでもない」(26)。

国学から文献学的国文学、そして文芸学的国文学へと展開するにあたって功績のあったのは、上述のように芳賀矢一であり垣内松三であるが、岡崎もその先師二人との関わりがあった。まず、芳賀とはその晩年における付き合いであるが、「芳賀先生と私」という小文には垣内松三が留学に出かけたあとをうけて東京帝大で「維新後の国文学」という題目で明治文学を講義したことが書かれている。そして、「私は国文学に新しい領域を拓くべき抱負はあったが、決して新しい時代の文学を研究することを希望していたわけではなかった。むしろ古典の世界を新しい眼で見る方に興味を持っていたのである」(26)。

芳賀が国学院大学長に就任すると岡崎を講師に招き入れた。「現代人の心に触れるような行き方で、日本の古い伝統を生かすべき人を、切に求めておられるようであった」(27)。

岡崎が当時の国文学界に対決したのは、ある意味で芳賀との対決であった。「先生に比すると、私は国学者的ではなく、芸術学者的である。伝統主義的、保守主義的ではなく、世界主義的、進歩主義的である。啓蒙的、教化的ではなく、純文学的である。こういう相違から来る肌合の合わない点がある。私が先生の単なる後継者として納まり切れない深い理由が、そこにあると言えないこともない。〈…〉もともと、これは実は先生と私との食い違いというよりも、国文学界というものと私との食い違いであったかも知れない。〈…〉先生は「国文学」を次の何物かへ押し進める者に対して、やはり寛大ではないかと思う。先生が国学から国文学を引き出されたように、我々は国文学から次のものを引出してもよいのではないか」(28)。変革への意志と道が生成していくには、学問分野があっても、他の分野における変革と同じような要素が働いているようである。

注

- (1) 実は、岡崎文芸学の問題意識を受けとめ、受け継ぎたい、というのが私の抱負である。すなわち、国学・国文学の内在的發展・連続的形成を評価しつつ、他方で洋学・西洋美学の持つ特性である論理化・概念化・範疇化という肯定的要素を国学・国文学理解と解釈において導入できないものか、という構想である。むしろ、岡崎文芸学の成否の評価をすべきであろう。細部の問題点は個々追究するしかない。
- (2) Cf. 松本三之介『国学政治思想の研究』（未来社、1972）；平林治徳「国文学と国語」『國語と國文學』第14巻第10号（昭和12年10月）、ほか。
- (3) 高木市之介「国文学研究史概観」『國語と國文學』昭和40年10月特輯号、p. 105。
ただし、ベエクの著作のうち、*Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften von August Boeckh*; herausgegeben von Ernst Bratuscheck, Leipzig: B. G. Teubner, 1877. などに目を通して、その文献学がいかようにナショナリズムの精神に由来するのかテキスト的根拠を確認できない。今後のさらなる研究で確かめてみたい。
- (4) 『芳賀矢一遺著 日本文学・文法論・歴史物語』（富山房、昭和3年）、p. 6。
- (5) 同上、p. 4。
- (6) 同上、p. 6。
- (7) 同上、p. 6。
- (8) 大久保正「文献学の成立」『國語と國文學』昭和40年10月特輯号。
- (9) 翻訳された著者のうち、チザルツ以外は、竹内敏雄『文芸学序説』（岩波書店、1952）に多少とも言及がある。
- (10) 斉藤清衛「学界への批判と反省」『文学』第5巻第7号（昭和12年）、p. 91。
- (11) 高木市之助「国文学と日本文芸学」『國語と國文學』第9巻第1号（昭和7年）、p. 6。
- (12) 安良岡康作「二つの日本文芸学（その一）」『専修国文』第50号、p. 112。
- (13) 斉藤清衛「学界への批判と反省」『文学』第5巻第7号（昭和12年）。
- (14) 岡崎義恵『雑華集』（宝文館出版、昭和37年）、pp. 202-3。
- (15) 同上、p. 203。
- (16) 同上、p. 203。
- (17) 同上、p. 204。
- (18) 同上、p. 212。
- (19) 久松潜一『日本文学研究史』（山田書院、昭和32年）、p. 2。
- (20) 同上、p. 2。なお、久松による研究は、私のような国文学の門外漢が国文学研

究の歴史を知る上で、その博学・勤勉・標準性等の点で、研究水準を保ちつつ穩当に目配りをして論じている、まさにスタンダードとして恩恵を与えてくれる。

- (21) 安良岡康作「日本文芸学—その成立と発展—」『國語と國文學』昭和 40 年 10 月特輯号、p. 112.
- (22) 同上、p. 115.
- (23) 岡崎義恵『日本文芸学』（岩波書店、昭和 10 年 12 月）、p. 635.
- (24) 岡崎義恵『雜華集』（宝文館出版、昭和 37 年）、p. 5.
- (25) 同上、p. 5.
- (26) 同上、p. 219.
- (27) 同上、p. 219.
- (28) 同上、p. 221.